AA研50周年特別企画

フィールドワークからの視点

飯塚正人
いいづか まさと／
AA 研副所長

AA研は、アジア・アフリカ地域を対象とした言語学、人類学、歴史学の研究推進を目的に1964年に創設されました。今年は創立50周年の節目の年となりますが、AA研における研究は、創立以来、常に「臨地調査＝フィールドワーク」を一つの柱としてきました。

そこで今回は、AA研において、その草創期から文献研究とフィールドワークの融合を実践してこられたインド洋海域史研究の第一人者である家島彦一氏と、1990年代から家島氏とともに海外調査をおこなってきた中東地域研究者の飯塚正人氏のお二人に、フィールドワークをめぐるさまざまなテーマについてご対談いただきました。

現在をフィールドワークすることが歴史学にとっていかなる意味を持つのか。文献研究とフィールドワークとが「車の両輪」となる時、そのフィールドワークは現場でどのように実践されるのか。研究の対象や方法が多様化・細分化する近年の状況において、互いに研究テーマの異なる研究者たちが集う共同研究をどのように認識し、それを実りある問題発見の場としていかに育んでいくことができるのか。

歴史学におけるフィールドワーク、インド洋海域史研究、家島氏が詳細な訳注とともに完訳されたイブン・バットゥータの『大旅行記』（全8巻、平凡社、1996-2002年）、共同研究の在り方などをめぐるご対談は実に2時間以上におよびましたが、今回は、その内容を凝縮して皆様にお届けいたします。

それでは、歴史学者である家島氏がフィールドワークを始められたきっかけを振りだしに、お二人の話を伺いましょう。

オマーン、カルハートの港市遺跡に残るビービー・マルヤム廟（2000年1月）。

1 歴史学におけるフィールドワーク

飯塚●家島先生がAA研で継続的に海外調査を始められたきっかけは、三木亘先生をリーダーとする共同研究プロジェクトによるものでしょうか。

家島●ええ、そうです。1972年の5月、板垣雄三先生の後任として三木先生がAA研に入られて、その2年後の1974年に文部省、現在の文部科学省の科研費補助金による海外学術調査「イスラム圏社会・文化変容の比較調査」が開始され、私はその研究分担者の一人として参加したのが最初です。その時、三木先生を中心としてイスラーム関係の所員、その多くは歴史学が専門でしたが、全員で頭をしぼり、深夜までかかって調査計画を立案し、申請書を作成したことを覚えています。もっぱら文書や写本などの記録史料を読んでいた歴史研究者がいきなりフィールドワークをやるということで、最初、何を研究対象とするか、どのような新しい方法を打ち出すべきかなど、戸惑いと苦心もありました。

その時、三木先生がとくに主張された2つの点、その1つはイスラームの生活・文化、とくに日々の暮らしや具体的なモノのレベルから捉えるという、いわば等身大の

家島彦一

やじま ひこいち／
東京外国語大学名誉教授、
元 AA 研

2014年3月12日（水）　於AA研

視点から歴史を総合的に組み立て、同時に日本との比較を重視するということです。それに関連して、民俗学者の宮本常一さんにも参加をお願いして、宮本流のフィールドワークの手法を学ぶ機会としました。

もう1つは、当時の民族学におけるフィールドワークではミクロな世界を対象とすることが一般的であったかと思いますが、歴史学のフィールドワークでは常に記録史料の研究で裏付けされた知識をもとに、トランス・リージョナルに広域・関連・比較・相互依存などの視点を重視することです。つまり、歴史学での国民国家を前提とした一国史の枠組みとか、定住や国境のうえに構築されてきた既存の歴史認識および社会像を打破することをフィールドワークを通じて目指すということですね。

飯塚●家島先生も、戦後から続くマルクス主義的な歴史学の潮流がまだまだ強い頃に、「歴史に法則などありはしない」というお立場で、ご自身のお仕事を現場から積み上げていかれるのは大変だったのではないでしょうか。

家島●私の場合、フィールドワークをおこなう前提として、フィールドと同時並行で、関連する記録史料の精査・研究を進めるように心がけました。フィールドワークと文献研究とは車の両輪のようなものですね。書かれた史料・資料をどのように読み、解き、そして語るかという研究のプロセスは、フィールドでの研究対象をどのように選択し、どのように見て分析し、そして語るかということと同じではないかと思います。

歴史学の場合、現在の自分と過去の記録が書かれた時代との間の時間差や空間的隔たりをどのように接近させ、対話させるかということが必要になりますが、その場合、歴史の現場に自らの身を置いて、時にそこで政治的混乱に巻き込まれたり、病気に罹ったりするなどの苦労を重ねながら、また素晴らしい風景を見て感動したり、土地の空気を感じたり、時にまた思わぬ人との偶然の出会いがあったりもする。そうした中で、新しいパラダイムを考える。そして再び、記録史料の内容の一つひとつにたち戻って考える、解く、語るといったことの繰り返しですね。

それに加えて、人や社会・政治・経済が激しく動くような時代の節目には、常に主舞台となるような場、歴史上の要地があるのではないかと思いますが、例えばバルカン半島、今のクリミア半島とか、レバノンやシリア、イラク、チュニジアなどですが、そうした歴史が複雑に交錯する接点の現場に出かけて行き、そこの自然地理・生態系の特徴とか、重層した民族構成や人々の考え方についてフィールド体験をする。そのことによって、実際に記録史料を読む際のヒントを得ることも一つの重要なアプローチの仕方ではないかということです。

フィールド学、現地学を重視するというのは三木先生や上岡弘二さんが常日頃から主張されていたことですが、それに関連した三木先生のユニークな方法は、海外での研究においては、隊員たちがいつも同じフィールドで行動し、同じテーマについて分担調査するという従来のスタイルを改めて、隊員それぞれの研究テーマや方法の独自性を最大限に尊重したということです。各自がばらばらのフィールドワークをおこなう代わりに、その調査期間中、一度は必ずエジプトのカイロとかシリアのダマスカスに集まり、それまで各自が見たこと、聞いたこと、感じたこと、調べたことを自由に語り合う機会を設けたのです。そのために、三木先生はカイロのタフリール広場に近いペンションのガーデン・シティハウスの一室で、オマル・ハイヤームという美味なエジプト産のブドウ酒を用意して、皆が集まって来るのを待っているのです。

飯塚●あのペンションは今もまだあると思います。私も1985年に初めてカイロに行った時に泊まったのは、あそこでした。

家島●そして、皆が集まると、酒を酌み交わしながら、「僕はあそこでこういう面白いものを見た」とか「これはどういう意味だろうか」など、翌朝まで賑やかに語り合うのです。そうすることで、それまで自分一人でやってきたことを考え直したり、再びフィールドに戻って補足調査したりする。私自身、そうした方式によって数多くの新しい知見を得ることができました。

飯塚●その時から数えて今年でもう40年ですね。

家島●すでに40年ですか。第1回の調査において、ある程度の成果が得られたので、その継続調査を是非ともおこないたいという強い思いから、帰国した後の1年をかけて全員が1冊づつ、調査報告書を出しました。それが *Studia Culturae Islamicae*（イスラム文化研究）という研究叢書であって、原則として英語もしくは現地語で書き、次の調査の時にはそれを現地に持って行き、同時に世界中の大学、研究所や図書館に発送したり、調査許可が必要となる場合、所轄官庁の人たちへの、いわば名刺代わりとして自分の本を提出しました。その後の調査、例えば1977–78年、79年、81–82年など、ほとんど毎年もしくは1年おきに調査に出かけ、そして調査報告書を書きました。*Studia Culturae Islamicae* はその後も、出版が継続されており、近く100冊に達すると聞いています。

2
インド洋海域史の研究

飯塚●次に、先生ご自身のフィールドワークについて少しお伺いしたいのですが。

家島●私は、狭い地域枠とか国家・国境を超えたところに成立するイスラーム世界のネットワーク構造とか文化交流圏の問題に関心を持ち、おもにアラビア語の史料を使って研究していました。そして、1969-71年度の2年間、AA研の「助手等の未開発言語修得のための現地投入」の予算枠で、初めてアラブ諸国に滞在する機会を得ました。

70年の春、南イラクのバスラという港町を訪れた時、チグリス川とユーフラテス川が合流してペルシア湾に注ぐ河口近くのシャッタル・アラブ川の川面に、木造型のダウ帆船が20-30艘の大船団で停泊している光景と出会ったのです。大型タンカーやコンテナ船が往き来するペルシア湾に、何故、このようなプリミティブな帆船が今もなお航海と貿易活動を続けているのかと大変不思議に思い、私自身がまるで1000年以上も昔のシンドバードの世界に飛び込んだような錯覚に陥ったのです。そこで早速、波止場近くで休憩していたダウの船員たちに、ダウはどこから来たのか、積荷は何かなど、簡単な質問をしてみると、彼らはパキスタンのグワーダル、カラチや、インドのマンドヴィ、ポルバンダル、ムンバイなどから出港したこと、胡椒、生姜、紅茶、砂糖や米などを運び、復路の航海ではバスラ産のナツメ椰子の果

モルディブ諸島マレーの波止場で（1980年1月末）。

パキスタンのカラチ・ダウポートで建造中のダウ（1977年3月）。

ケニアのラム島沖を帆走中のラム・ジャハーズィーと曳き舟（ホーリー）（1977年2月末）。

南インドのコロマンデル海岸で、筏舟（カットマラム）（1980年1月）。

スリランカ南部のベントータ海岸で、縫合型ダウ・バルワの漁船（1980年3月）。

実、デーツを積み込むこと、毎年、このようにアラビア海の往復航海を続けており、時には南アラビアのライスート、アデンや東アフリカ海岸のモンバサなどにも行くとのことでした。

私は、幼い頃から海の世界に憧れのようなものを抱いていたこともあって、その話を聞いた時、ダウが永年にわたり往還運動をおこなっているペルシア湾・アラビア海という海域世界をさらに拡大させた「インド洋海域世界」という新しいパラダイムを発案するようになったのです。

そして、1974年以降のフィールドワークでは、いわばインド洋海域世界というバーチャルな世界の具体像、そのリアリティーをできる限り自分のものとして認識し、身近で確かなものにするため、全インド洋の国々の各地、港や島嶼を広く旅することによって、そこに共通する海域世界の実像を捉えること、さらには地中海世界とも比較したのです。そうしたフィールドで得た感覚や成果をベースにして、記録史料を読み、解き、語るという研究プロセスを実践してきました。私が研究リーダーとなって組織した海外調査では、飯塚さんと一緒にオマーンとアラブ首長国連邦を訪れましたね。

飯塚●先生はフィールドで、例えば、オマーンのスールや、アラブ首長国連邦のドバイ、ホールファッカンなどの港で、ダウに乗っている人たちとよくお話しされていましたよね。中東の人間が明るいこともあると思うのですが、海の人間というのは、家島先生の質問にフレンドリーに応じてきて、色々なことを答えますよね。

家島●彼ら海の人間にとって移動というのは非日常のことではなく、日々日常のことなのです。いつ、どこに出かけて行ってもいい、誰とでも気楽に会って語り、そして沢山の人との出会いこそがネットワークを作るための最良の手段であり、生まれてから死ぬまでの間、チャンスがあれば、どこへでも行って子供をつくり、どこで奥さんをもらってもいい、ある意味での自由奔放さがあると思うのです。例えば、イエメンのアデンやムカッラーなどで、マレー系の奥さんを連れたアラブ人と出会いました。インドネシアのアチェやシンガポールとアデンとの間はインド洋を越えて5000キロも6000キロも離れていますが、そこには何の違和感も距離感もないのです。

飯塚●ドバイかどこかで先生に伺ったと思うのですが、ダウの出入港を記録したダウ・ポートの帳簿には、今だにダウの船籍と乗員の国籍についてアラブ、アジャム、インド、アフリカの4つの分類しかないのですか。

家島●そうなのです。とくに私が調査をおこなっていた1980年代までのことですが、ダウの出入港記録、いわゆるダウ・レコードはダウの活動する海域のそれぞれの港に残されています。ダウが入港すると、その船長はダウ・オフィスに出頭し、自分の名前とダウの船名、出港地、途中の寄港地、乗員数、おもな積み荷、出港予定日と次の寄港地、最終港などをオフィサーの前で記入するのです。飯塚さんがおっしゃったように、ダウ・レコードには4つの分類しかない。アフリカは東アフリカ海岸、アラブとは紅海周辺のイエメン、スーダン、サウジアラビア、ペルシア湾岸のオマーン、ドバイ、カタール、クウェートなどがそこに含まれます。一方、アジャムとはイランのことです。イランの主要なダウ・ポートはホラムシャフル、ブーシェフル、コング、バンダレ・アッバースなど。インドはヒンディーとだけあって、パキスタンとインドの区別はなく、カラチ、グワーダルやインド・グジャラート地方のマンドヴィ、ジャームナガル、ポルバンダル、ムンバイ、マンガロールなどですね。この4分類はダウの船型、大きさ、積み荷の種類などの違いとも深く関連しています。

しかし、1980年以降になると、次第に近代国民国家による国別の分類に統一されるようになります。なお、船長や船員たちは、船員カードのような身分証明書を所持していますが、パスポートは持っていません。毎年やって来る船長や船員の顔を見れば、誰だかすぐに識別できるわけですからね。

飯塚●今では港はすっかり整備されてしまって、ダウもきちんと港に入っていますが、もともとはアラブ首長国連邦のフジャイラで見たイランのダウのように、砂浜にそのまま上がっていましたよね。

家島●そうです。ドバイの場合ですと、もちろん税関の事務所はありますが、ドバイ・クリークの岸辺に横付けされたダウの積荷はそのまま道路に放置されたり、道路脇に積んであった荷物が直接ダウに積み込まれており、その間を仕切る柵や金網のようなものは何もないのです。

飯塚●先生はホテルの窓から、ずっとその様子を観察しておられましたね。

家島●そう、ずっと見ていました。あのような光景を見ると、やはり海の世界だなと思いますよね。今、日本でそのようなことをやったら、密輸とか密入国とか言われますよ。

3 イブン・バットゥータ『大旅行記』の邦訳

飯塚●先生は、イブン・バットゥータの『大旅行記』を邦訳されている時に、各地の博物館に行かれると、土地ごとに食器や家具などの日用品の名称は独特で違いがあるからと、盛んにメモされておられましたでしょう。あれは、やはり翻訳をなさる際に辞書では分からないようなものがあったからですか。

紅海に臨むアイザーブの港市遺跡（1986年2月）。

聖者シャーズィリーの霊廟のあるフメイトラーのオアシスに至る砂漠道（2000年2月）。

南イランのクヴァール川に架かる
サーサン朝時代の橋梁址（1987年1月）。

カシュカーイー遊牧民。

サーサン朝時代のキャラバン・サライ址。

クーヘ・アースィヤーブ・バーディーの大断崖と
カシュカーイー遊牧民のテント。

家島●イブン・バットゥータの旅の記録に書かれたアラビア語は、今から650年以上前に使われていたものです。しかも、彼は現モロッコのタンジャで生まれたので、彼の使用したアラビア語はベルベル語の混じったマグリブ・アラビックとアンダルス・アラビックです。ですから、一般の辞書を使って解釈すると意味を取り違えたり、同じ単語でも別の意味を含んでいたりします。イブン・バットゥータの記録のユニークな点として、彼は自分の国ではこのように言っているが、普通のアラビア語ではこのことであるとか、訪れた旅先ではこのように喋っているとか、とくに町・村や地域名についてはシャクル、つまりアラビア語の読み方をちゃんと書いてくれているのです。しかも食べ物とか食器、テーブルなどについても、どういう形のもので、どのように使うかといった説明文を加えた場合もあります。

こうした点は、他の旅行記にはあまり見られないですよね。アラビア語の辞書を引くと、これは籠、瓶や皿の一種などと書かれているだけで、実際の形とか大きさが分からず、あまりぴんとこないですよね。だから、私は現地を訪れると、まず最初にその土地の市場と博物館に出かけます。そうすると、その土地で使われている独特の食べ物や物品の名前、市場にどのような人が集まっているか、なども分かります。イブン・バットゥータから直接、旅の話を聞き取り、本にまとめた人物はイブン・ジュザイイという、当時、売れっ子の若い文学者でした。イブン・ジュザイイはバットゥータの話をできるだけ面白くするため、たくさんの驚異譚を挿入したり、詩を書き加えた部分もありますので、偽作だと主張する一部の研究者もいます。しかし、常に意味内容を変えずに正確に書き写そうとした態度が見られます。幸いなことに、現在、ジュザイイ自身による直筆本の後半の一部がパリの図書館に所蔵されています。この点は、マルコ・ポーロの記録とは違いますね。

飯塚●先生は海と港を中心に調査されておられますが、一方で、イブン・バットゥータにも、そして先生が現在邦訳を進めておられるイブン・ジュバイルによる12世紀のメッカ巡礼記にも、陸路に関する記録がかなり詳しく残されています。それらの陸上ルートを踏査するフィールドワークも同時になさってこられたのではないですか。

家島●そうです。私はこれまでに2つの重要な陸上交易ルートの調査を実施しました。

その1つはナイル川と紅海を結ぶ東部砂漠越えのキャラバン・ルートの調査です。この交易ルートは、おそらく紀元前の古代エジプト・ファラオの時代からすでにあったもので、ローマ時代、ビザンチン帝国の時代、そしてイスラーム時代にわたって、極めて重要な役割を果たしました。しかし、現在、過酷な自然条件と、それに加えてエジプトとスーダンとの間の国境未画定地域であるために、地図の上でも未測量区ですし、これまでに踏み入った人や歴史研究もほとんどありません。私は、飯塚さんや川床睦夫さん（中近東文化センター元主任研究員）などの協力を得て、イブン・ジュバイルやイブン・バットゥータ、その他にトゥジービーなどのアラビア語の旅行記を使って、あらかじめ現代の地図にルート上の停泊地・水場・ワーディー（涸れ河）・山などの位置を想定しておいたうえで、実際のフィールド調査をおこないました。

もう1つはイラン高原とペルシア湾を結ぶザグロス山脈越えのキャラバン・ルートの調査であり、上岡弘二さんと共同で調査をおこないました。当然のことですが、海のルートは陸のルートと相互有機的に繋がっています。もしもキャラバン隊が港に到着した時点で、すでに船が出港していたならば、さらに1年間、次のモンスーンを利用して出る船を待たなければならないことになります。

4
共同研究の在り方

飯塚●三木先生をはじめとする先達の方々がなさったように、イスラーム圏に関するAA研の海外調査は、原則として共同研究の分担者各自の地域、研究テーマと方法を最大限に尊重しながら、同時に一度はどこかに集まって、お互いに得た情報を交換し合うというスタイルでやってきました。しかし現在では、その頃よりも研究がどんどん細分化していく中で、共同研究をどうしていくかという問題が生まれています。

例えば今、AA研のベイルート海外研究拠点（中東研究日本センター）でおこなっているのは、「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存」という国際共同研究ですが、そこでは現地のレバノン人研究者はもとより、レバノン生まれでフランスの研究機関に所属している研究者やドイツ人のシリア研究者、イランを専門にするフランス人研究者といった顔ぶれを共同研究員に委嘱して、日本からもたくさんの研究者が出かけて行き、共同で調査と研究を実施しています。また、科研費によるグローバルなレバノン・シリア移民の研究もおこなっています。実は本学、東京外国語大学には、レバノン・シリア移民を受け入れた側である南米の研究者、とくにブラジルの専門家がおられます。そこで、移民の受入れ側であるブラジルの専門家と移民を送り出す中東の専門家とが一緒に共同調査をおこなって、双方向から研究成果を挙げているわけです。近年、ビル・ゲイツと世界一の富豪の座を争い続けているカルロス・スリムなどもそうですが、とにかくメキシコから中南米にかけての地域は、レバノン・シリア移民が政治的にも経済的にも非常に強い影響力を持っていますので。

家島●とくにレバノン人、シリア人の場合、世界中にさまざまなネットワークを持っていることで知られていますね。南米だけでなく、西アフリカやオーストラリアなどにも。

飯塚●もう一つ、現代における大きな問題は難民です。オーストラリアでは、紛争を逃れて移り住んできたソマリア人やイラク人のタクシー運転手などに出会いました。このように問題関心は少しずつ近現代にシフトしていますが、AA研でのイスラームに関する共同研究の中心は、三木先生の時代と同じく、人の移動やモノの交換といったネットワークの研究ですので、家島先生から今後の研究の展望に関連することを少し伺えれば、と思うのですが。

家島●人の移動、移民・難民などはまさしく近現代の重要問題ですので、三木先生の時代も今も同じく、大変に魅力ある恰好の共同研究のテーマです。しかしここで一口に共同研究といっても、その共同研究のやり方、具体的なテーマの設定や研究方法などについて、また参画するメンバーの選び方にも、一概に決められない難しい問題がありますね。AA研の所内でも、共同研究の在り方について、皆さんの間で討議を重ねてみたらどうですか。また、共同研究の成果というものは数学のようにクリアーな一つの答えとか結論を導き出すことではなく、多様な問題発見のプロセスそのものであって、さらに今後の研究展開につなげていくための問題集のようなものではないかと、私は考えています。

飯塚●共同研究を進めていく過程で、お互いに刺激を与え合うような研究でないと面白くないということですね。

家島●科研費による共同研究の申請書を提出する時には、もちろん、あらかじめおおまかな研究上の見通し、結論の予測を設定しますが、メンバーのすべての人たちがその共通の予測に向かって、常に強い興味を抱き、各自の独自の鋭い視点と方法を発揮することが新しい問題の発見につながるのだと思います。

飯塚●家島先生は、とくに研究対象が広域ですが、個々の研究者が広い関心を持たなければならないということですね。

家島●そうです。狭い問題でも、広い視野の中で個別の問題を見ていかなければ、全体を見失ってしまう恐れがありますね。細かい事実を一つひとつ並べてみても、「ああ、そうですか」で終わってしまい、そこからどういう問題を発見し、相互にどのようにつなげて、一つの大きなもの、新しいものを築いていくのか、メンバーの人たちがそこから何を学び、得るかといったこと自体に、共同研究の大きな成果があるのではないかと思います。最後に一言だけ、是非とも申しあげたいのは、私がAA研に在籍して一番よかったことは、先輩の富川盛道、山口昌男、日野舜也、中村平次などの諸先生方、三木先生や上岡さん、中野暁雄さん、永田雄三さんなどの優れた同僚たちがおられて、そうした人たちから多くのことを学ばせていただいたということです。そのことが研究所として、最も重要なことではないでしょうか。相手の学問を知り、学び、お互いに切磋琢磨していくことこそが本当の共同研究ではないですか。